

十二月度御経日法話（懈怠誨法について―たゆむ心に魔が侵入）

松野殿御返事

在家の御身は、但余念なく南無妙法蓮華経と御唱へありて、僧をも供養し給ふが肝心にて候なり。それも経文の如くならば随力演説も有るべきか。世の中ものうからん時も今生の苦さへかなしし。況してや来世の苦をやと思し食しても南無妙法蓮華経と唱へ、悦ばしからん時も今生の悦びは夢の中の夢、靈山浄土の悦びこそ実の悦びなれと思し食し合はせて又南無妙法蓮華経と唱へ、退転なく修行して最後臨終の時を待って御覽ぜよ。

（一〇五一頁）

ここで大聖人は、在家信徒としての修行のあり方を明確に御示してあります。

まず、御本尊をしっかりと拝みまいらせるといふことです。それもただ題目を唱えればよいというのではなく、「但余念なく南無妙法蓮華経と御唱へありて」と仰せられてゐるように、第一に寸暇を惜しんで御本尊に向かい奉り、余念・雑念なく、一心に御本尊を信じて唱題に励むといふところまでの、強い渴仰心に立つた唱題でなくてはなりません。また、第二に御供養をすることの大切さをお教えくださっています。私達凡夫は、

この地球上で最高の宝である命を仏法のために捧げるときに、初めて重い悪業も消滅させることができるのです。しかして、毎日の命を支える糧となる宝を、精いっぱい志をもつて仏様に御供養申し上げることは、そのまま命を御供養する意義にあたるのです。ゆえに大聖人は、他の御書においても、「仏にやすやすとなる事の候ぞ、をしへまいらせ候はん、（中略）早魃に、かわけるものに水をあたへ、寒氷にこぼへたるものに火をあたふるがごとし」（一五二八頁）と仰せられて、御供養をすることの大切さを教えられていきます。また三番目には、「随力演説」を仰せられています。自らの力に随って、持てる力をふりしぼって精いっぱい正法を説き、誨法を折り伏していかななくてはならないと仰せなのであります。

私達が信仰をする真の目的、それは、「三世に揺るぎなき成仏を遂げること」にあるわけですが、その究極の目的を果たすことができるよう、一生涯、強盛に信仰を貫き通すことを促されているのです。

愚かな凡夫の常として、生活上に行き詰まることや苦しいことが起きると、そのことで頭がいっぱいになって、勤行にも身が入らなくなってしまうたり、また嬉しいことがあると、有頂天になって信心を忘れてしまったりというようなことがあるものです。

しかし大聖人は、「一睡の夢であるはずの今生の苦しみですら、これほど苦しく感じている。ましてや後生に地獄に墮ちる苦しみというのはどれほどのものであるうか」「今生の喜びは夢の中の喜びにすぎない、本当の喜びは、仏果を成じて、三世にわたって崩れない成仏を勝ちとることである」と肝に銘じて、なおなお唱題行に励むべきことを教

えられているのです。

この仰せを拝するとき、今生のでき事に一喜一憂して、信仰を失うことがいかに愚かなことかを、はつきりと知ることができるのです。それ故、本当の信仰というものは、後生に成仏を遂げることが最大の願いとして、そのためには、自らの生命に刻まれた悪重業を消し果てるまで、たゆまず怠らず進めていかななくてはならないのです。

またこのように、後生において必ず成仏を遂げることができるような、正しい強盛な信仰をしていくならば、かえって今生における悩み・苦しみも、必ず解決することができ、生命力に溢れた毎日を送ることができるのであります。

信心とはただ単に、御本尊を疑わずに願ひ事を一心に御祈念していくということではありません。即ち、信心とは信順の心であります。つまり「法華經の心、法門の道理」をよく弁えて、それを信じ、自らを従わせしめて生きていくことであり、そこを通じて御本尊を一心に拝みまいらせていくことが大切なことなのです。そのようにしてお題目をお唱えしてこそ、大聖人は「差別なきなり」と仰せのように大聖人様がお唱えまいらせられるお題目と同じように大功德が生じて、悪業の転換も、一生成仏も叶うのであります。而るに「法華經の心、法門の道理」というものに背いてお題目を唱えたならば、その功德には大きな違いが生じてくるのであると、大聖人様は信心のあり方を厳しく教えて下さっております。即ち「法華經の心」に背かない姿、信仰の姿勢とは、「謗法を犯さない」ということにつきるのであり、これこそが「法華經の心」に適った信仰の姿勢であります。

そこで、本日は十四謗法の中の第二の「懈怠謗法」についてお話し致します。

「懈怠」とは、おこたりなまけるといふ意で、つまり、仏道修行に力を尽くさないことです。世間一般のことでも、「怠惰」は人間をダメにしてしまうものですが、仏道修行においてはなおさらです。なにしろ、成仏という大目的にチャレンジしていくのですから、毎日、うまずたゆまず仏道修行に精進しなければなりません。たとえばスポーツにしても、目に見えるすばらしいプレーの背後に、どれだけ日々の隠れた練習が積み重ねられていることでしょうか。基本的なことを、それこそ無数にくり返して、晴れの舞台にのぞんでいるのです。

懈怠におちいらぬためには信心の持続が大切です。大聖人は、上野殿御返事（一二〇六頁）に、「抑今の時、法華經を信ずる人あり。或は火のごとく信ずる人もあり。或は水のごとく信ずる人もあり。聴聞する時はもへたつばかりをもへども、とをざかりぬればすつる心あり。水のごとくと申すはいつもたいせえず信ずるなり。此はいかなる時もつねはたいせえずとわせ給へば、水のごとく信ぜさせ給へるか。たうとしたうとし」と仰せられています。この上野殿とは、大石寺開基檀那となつた南条時光です。时光は、若くし

て大聖人、日興上人にご奉公し、熱原法難に際しては、獅子奮迅の活躍をし、また、大聖人御遷化後は日興上人を大導師と仰ぎ、七十四歳で亡くなるまで、正法・正師の嚴護に至誠を貫かれました。大聖人は、こうした常日頃の時光の不退の信心を、とうとうと変わらぬに流れる水のような信心であると激賞されています。まことにわたしたちが範とすべき信仰の姿です。火の燃え立つごとく、一時は熱烈に信心しても、次第に遠ざかって退転するのは懈怠の標本ですが、人の心は移ろいやすいものです。立正安国論（二四八頁）にも、「人の心は時に随つて移り、物の性は境に依つて改まる。……汝当座に信ずと雖も後定めて永く忘れん」と説かれています。懈怠の恐ろしさは、それがつづくとするすると信心を壊してしまふところにあります。しかも、日常生活のなかに、いつのまにか侵入してくるのですからやっかいです。

聖人御難事（一三九七頁）に、「月々日々につより給へ。すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし」とありますが、この「たゆむ心」が懈怠なのです。そうした心が生じると、奪命魔、奪功德魔である魔が、はじめはそつとさりげなくしのび寄り、やがて、そこをわが住居のように占領してしまふのです。しかし、こわいことに、人はそれに気づきません。いつしか惰性に流された日々を送っています。そうなれば、魔の思うつぼ、いいようにあやつられてしまいます。信心の感激はもはやなく、勤行も形式だけとなり、寺院に足を運ぶ気持もうすれてしまいます。そして、ついには、勤行すらおこたつてしまします。懈怠の命には輝きはなく、煤だらけです。生きていても、自由に生きているとはいえません。

また、人は、しばしば自分の弱さ、自墮落をおおい隠したり、ときには正当化しようとして、強がってみたりするものです。虚栄、見栄、高慢のうちに、いつも見え隠れしているものは、心の弱さのようです。本当の信仰者の尊さや強さは、何があつてもこの信仰に生きるぞ、という一念、つまり、去年よりは今年、先月よりは今月、昨日よりは今日、今日よりは明日へと精進していく命そのものにあるのです。すがすがしさや美しさ、たくましさなどが内面よりほとぼしり、輝いている人がいますが、それは、困難にめげず、常に自分自身の成長のために仏道修行に精進しているからなのでしょう。

そのためには、どうすればよいかといえますと、大聖人は一生成仏抄（四六頁）に「深く信心を発こして、日夜朝暮に又懈らず磨くべし。何様にしてか磨くべき、只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを、是をみがくとは云ふなり」とご教示されています。この御文の前には、唱題（仏の名を唱え）、読経（経巻をよみ）、御本尊へのお給仕が「一念に納めたる功德善根」になると説かれています。こうした日常の所作がみずからの命をみがいていくことになるのです。「懈らず磨く」との御文を、深く心にとどめるべきでしょう。

又、大聖人は、信心を持続することの難しさについて、四条金吾殿御返事（七七五頁）に「受くるはやすく、持たもつはかたし難。さる間成仏は持たもつにあり」と仰せられています。この「持たもつ」とは憶持おくじ不忘ふしやう（心に思おもつて、身にも持たもち、銘記して忘れず、いかなる場合にも決してこれに背かず、それを実行すること）すなわち、「三世の諸仏の大事たる南無妙法蓮華經を念ずる（同頁）」ことです。要するに、自己自身と妙法とが一体となるまでに修行すること、いいかえれば、常にわたしたちの生活の中心に御本尊がましましている、といえるまでになりきることです。あたかも名ピアノストが、ピアノと一体とていえば、これは、真実を求める心を失ってしまうことを誠められたものでもあります。通常の「なまけ」の誠めという消極的な意味あいではなく、積極的に真実を求めることをすすめたものといえましょう。せつかく正法に入信できた私たちは、いい加減な信仰であつては、過去世からの重罪を一生のうちに消し果てることもできず、「不よそ軽ろ輕ろ毀きの衆」と同じように、最後に地獄に墮ちる結果となるのであります。このように大聖人様のさまざまな仰せを拝するとき、自らの重罪を全て消滅させるため、また知らずに謗法罪を重ね、墮地獄への道を進んでいる世間の人々を救うために、私たちは、いよいよの強盛な折伏行に奮い立たねばなりません。以上。

（令和四年十二月度・御経日の砌）